

## 立津春方に関わる新聞・辞令等

～近代宮古の解明の一助として～

仲宗根将二（博物館協議会委員）

### はじめに

宮古の近代は、立津春方と盛島明長・石原雅太郎の両派の対立・抗争を抜きにしては語れないと、考える契機になったのは慶世村恒任の『宮古史伝』を読んだことにさかのぼる。1950年代の終わりごろである。その後、伊志嶺賢二『回顧20年 宮古教育界夜話』（1961年）、吉村玄得『石原雅太郎伝』（1963年）、同『盛島明長伝』（1965年）を手にするようになって、いっそうその感を深くした。その間には故池村恵祐の薦めもあって、亀川恵信編『宮古先覚者の面影』（1954年）にも目を通すことができた。立津と盛島・石原は宮古島高等小学校において師弟関係にあり、長じては母校の校長立津と首席訓導石原という因縁浅からぬ関係にありながら、校長立津の方針をめぐって対立を深めるようになった。「学校紛擾事件」あるいは「十二人党事件」の名で広く知られる県当局を巻き込んでの学園騒動である。このとき盛島は宮古出身初の医学専門学校出の開業医として物心両面で高等小学校から師範学校の同期でもある石原らを援助している。この事件を契機に立津は教育界を去って、精神修養団体「丹誠会」を組織して社会教化活動に乗り出している。一方石原は暫らく教育界に止どまっていたが、盛島が県政・国政に参画するようになって行を共にし、終生盛島の参謀役をつとめている。

このようにその後の両者は、教育界ばかりではなく、政治、経済、産業などの宮古の各面にわたって対立、抗争を深めていった。みようによっては1890年代の「人頭税廃止・島政改革」を要求して決起した宮古農民の勝利のエネルギーが、その後の宮古の発展に結びつかず矮小化されてしまったのは、この立津・盛島両派の宮古ぐるみの対立、抗争に起因していると考えている。立津率いる「農民党」はのち憲政会・民政党へ、盛島率いる「青年党」は政友会へと姿を変えているからである。『宮古史伝』は当時の状況を次のように概説している。

「島内に於ける制度改変は逐年進歩の度を加へ来り、島内一般に政治行政に関する知識が増進すると共に政治的觀念も追々に生じ、大正3・4年の頃からは世相の上に現れて来る様になった。……あらゆる事態に関連し、遂には感情に走って社交上にも事業其他制度上にも絶えず党派の衝突を見、大正5年には農民・青年の両派が議員選挙の不正投票の為に大衝突を起し警官は尽く抜剣して漸く鎮撫したといふ所謂「議員騒動」があり、全6年には台南・東洋の両製糖会社工場設置に関する党争及び県議選挙等があつて、多くの人々の感情はその悪化の度を深うするものがあつた。大正8年5月には衆議院議員選挙法施行

され、全9年議会解散して総選挙となるや、党争的感情は極度に働き互いに火花を散らして接戦し所謂「僧籍問題」の曝露となったが、何れも不結果に終り、此年政友会分会等の設立等がある、爾来党争気分は万般の事象に現はるゝようになって今日に及んだ。」

詳細については後日「宮古党争史論」で論ずることにする、と断わつての概説であるが、病軀を押しての執筆であったために慶世村はその後間もなく病没して、日の目をみていない。この両派の対立・抗争は、「15年戦争」後の1950年代まで尾を引いているようである。

このように宮古の近代に不可分に関わる両派の抗争についての解明は未だ十分とはいえない。「石原」「盛島」の両伝記はあくまで2人の側からの近代宮古であつて、立津側からの視点には欠けるものがある。『平良市史』第1巻通史編1が、これらの文献を整理し、両派について政治の揺籃期、近代政党へ移行する前の党派的集団とみなし、その果たした役割は、「郡民を政争の渦に巻き込み人心を不安に陥れた反面、郡民の政治的感覚を養い、政治的視野を広め」て、「民権の自由を幾分なりとも自覚させ、自由の活路を求めて思想、文化の水準を一段と引き上げた」と概説している（下地康夫分担執筆）、のみである。

本資料の紹介は、これら諸論考の執筆当時余り知られていなかった新聞資料を整理し、「辞令」等を加えて、可能な限り立津の足跡を鮮明にするところにある。それゆえ全体としての近代宮古への位置づけは稿を改めるつもりである。なお収録に当っては、新聞資料以外はすべて文頭に※印を付し、識別できるようにした。また、新聞名『琉球新報』『沖縄毎日新聞』は初出以外は「琉球」「沖縄毎日」と略記した。

#### 1870（明治3）年

※明治3年10月15日 砂川間切西里村（羽立里：現平良市西里359番地）に生まれる。1943（昭和18）年9月12日死去

#### 1893（明治26）年

※1. 卒業證書 沖縄県士族 立津春方 明治3年11月生 右者当校ニ於テ尋常師範学校ノ課程ヲ卒業セリ仍テ茲ニ之ヲ證ス 明治26年3月20日 沖縄県尋常師範学校長 正八位 児玉喜八 52号

※2. 任沖縄県訓導立津春方 平良尋常小学校兼宮古島高等小学校在勤ヲ命ス 月俸金10円給与ス 明治26年3月30日 沖縄県庁

※3. 沖縄県訓導 立津春方 任沖縄県宮古島高等小学校訓導 但本科正教員勤務 明治26年7月20日

#### 1895（明治28）年

※4. 沖縄県宮古島高等小学校訓導 立津春方 自今月俸金11円給与 明治28年1

月11日 沖縄県庁

※5. 宮古島高等小学校訓導 立津春方 学事為研究京都大阪二府へ出張ヲ命ス 明治  
28年3月26日 宮古島役所

1896 (明治29) 年

※6. 沖縄県宮古島高等小学校訓導 立津春方 自今月俸金13円給与 明治29年1  
月10日 沖縄県庁

※7. 「高等科ノ作文教授ニ就キテ」(『琉球教育』8号、9. 21刊)

※8. 「尋常科卒業生に就き感ぜしふしぶし」(『琉球教育』11号、12. 25刊)

1897 (明治30) 年

※9. 「生徒ノ躰方ニツキテ」(『琉球教育』12号、1. 16刊)

※10. 沖縄県琉球国宮古郡砂川間切西里村 立津春方 明治27. 8年戦役ノ際軍資  
ノ内へ金1円献納シ及ヒ従軍者家族扶助トシテ金11銭寄付候段奇特ニ候事 明治30年  
6月1日 沖縄県知事 従四位 勲四等 男爵 奈良原繁

※11. 「書読文教授ニツキテ」(『琉球教育』18号、8. 20刊)

※12. 「書簡文ニツキテ」(『琉球教育』20号、11. 20刊)

※13. 沖縄県宮古島高等小学校訓導 立津春方 自今月俸金14円給与 明治30年  
12月15日 沖縄県庁

14. 立津、謝花、服部三君の着京(『琉球新報』4. 23) 宮古高等小学校訓導立津  
春方氏は高等師範学校国語専修科に、本県尋常中学校雇教員謝花寛功氏は高等師範学校本  
科に入学の爲め又本県尋常師範学校雇教員服部行正氏は文部省英語科教員受験の爲め曩に  
上京の途に就きたるが此程孰れも無事着京したる由。

1900 (明治33) 年

※15. 休職沖縄県宮古島高等小学校訓導 立津春方 任香川県丸亀中学校教諭 明治  
33年4月4日

16. 立津春方氏(『琉球』6. 29)

立津春方氏は高等師範学校卒業後丸亀中学校に在職し居りしが本県中学校の聘に応し此  
程帰県したり。

※17. 香川県丸亀中学校教諭 立津春方 任沖縄県中学校教諭 月俸金40円給与ス  
明治33年7月7日 沖縄県庁

※18. 会員 立津春方氏 第1回夏期講習会講師ヲ囑託ス 明治33年7月19日  
沖縄県私立教育会総裁 従四位 勲三等 男爵 奈良原繁

19. [広告](『琉球』8. 23)

今般東京青年会の事務所及寄宿舎建築の件に付寄付金募集の儀留学生父兄、青年会々友、

旧留学生に於て引受くる事と相成り委員を選定し分担を定め那覇は琉球新報社、首里は沖繩銀行に於て事務を取扱ひ候間左の条件御覧の上続々高嶺朝教、百名朝計宛にて御寄附あらんことを希望す

委員 立津春方 (外 3 3 人略)

一、募集期間 明治 3 3 年 1 2 月中限

1 9 0 1 (明治 3 4) 年

※ 2 0. 故下川貞文新里尋常小学校長追悼会立津春方演説(弔辞) 明治 3 4 年 8 月 2 0 日 (『琉球教育』 7 1 号, 明治 3 5. 3. 1 7)

※ 2 1. 中学校教諭 立津春方 中学校生徒左記三府三県修学旅行ニ付為引率出張ヲ命ス 鹿兒島県、兵庫縣、大阪府、京都府、愛知県、東京府 明治 3 4 年 3 月 2 0 日 沖繩県庁

※ 2 2. 「国語につきて」(『琉球教育』 6 1 号、6. 1 0)

※ 2 3. 沖繩県立中学校教諭 立津春方 月俸金 4 5 円給与 明治 3 4 年 7 月 1 日 沖繩県庁

2 4. 宮古高等小学生と軍談 (『琉球』 1 0. 2 9)

中学校教諭立津春方氏は其郷里なる宮古島高等小学校生徒の來朝につき知識啓発の一助にもならんかとの考より同氏の主催にて去る 2 6 日夜旅館親交館に於て軍談会を催ふし講談師吉田某を招き岩見武勇伝を講演せしめたりと云ふ。

2 5. 宮古小学校教員の建碑 (『琉球』 1 2. 9)

十余年間宮古郡の教育に熱心尽力せし故新里尋常小学校長下川貞文氏の為め立津春方、白井勝之助の両氏発企者となり同郡有志者より義捐金を募り本年 8 月石碑を建立し祭典を執行したる由なるが、之に就き其未亡人より左の令状を送来れりと。(明治 3 4 年 1 0 月 3 日付「御礼状」略)

1 9 0 2 (明治 3 5) 年

2 6. 長距離競走会へ寄付人名 (『琉球』 3. 7)

金 4 0 銭 立津春方 (ほか略)

2 7. [広告] 沖繩県師範同窓会員諸君ニ謹告ス (『琉球』 5. 1 1)

今般師範学校教諭新田義尊先生休職を命ぜられ不日当地を去らるることに相成り居り候然るに同先生は御赴任以来十年の久しき実一日の如く本県教育の改善を計らるるに於て与褒を外にし真面目に尽瘁られたるは跡からざる功績と存じ候 特に余輩同窓の先生に享けたる余沢は亦鮮少なからざるを信じ候 依而此際応分の金員を摺集し聊餞別の意を表し度候間御賛成あらんことを希望す 追而金額は 5 0 銭以上とし本月末日迄に下名に御届被下度願上候 猶領収は本紙を以て報告す 明治 3 5 年 5 月 1 0 日 發起人 高良隣徳 立津春方 与儀清忠 切通唐代彦

※ 28. 中学校教諭 立津春方 職務格別勲励ニ付金 35 円賞与ス 明治 35 年 12 月 23 日 沖縄県庁

1903 (明治 36) 年

※ 29. 沖縄県立中学校教諭 立津春方 依願退職ヲ命ス 明治 36 年 5 月 30 日 沖縄県

30. 立津教諭の辞職 (「琉球」 6. 1)

中学校教諭立津春方氏は疾病職務に堪へざる廉を以て辞表を提出したるか去月 30 日聴許せられたり。

31. 宮古通信：夏期講習会 (「琉球」 9. 5)

8 月初旬より夏期講習会を平良尋常小学校内に開き各学校正、准、代用教員百余名、元本県中学校教諭立津春方、首里小学校裁縫教員間ハサキ、当高等小学校訓導饒平名長陣の教授を受け此程其終了を告げたり。何れも熱心励精の結果成績頗る佳良なりしと云ふ。

1904 (明治 37) 年

※ 32. 立津春方 兵庫県立豊岡中学校教諭ニ任ス 但八級俸給与 明治 37 年 1 月 29 日

※ 33. 豊岡中学校教諭 立津春方 特別勲励候ニ付金 5 円賞与ス 明治 37 年 12 月 14 日 兵庫県

1905 (明治 38) 年

※ 34. 兵庫県立豊岡中学校教諭立津春方 休職ヲ命ス 明治 38 年 3 月 28 日 兵庫県

※ 35. 休職兵庫県立豊岡中学校教諭 立津春方 福岡県立福岡工業学校教諭ニ任ス 九級俸ヲ給ス 明治 38 年 4 月 14 日

1908 (明治 41) 年

※ 36. 福岡県立小倉高等女学校教諭立津春方 七級俸ヲ給ス 明治 41 年 4 月 22 日 福岡県

1909 (明治 42) 年

37. 島巡り 天南漁夫 (「琉球」 9. 2)

7 月 24 日 (前略) 此朝友人立津春方氏の嚴父逝去す。午後 4 時其葬式に会す。

38. 宮古短信 9 月 7 日 (「沖縄毎日新聞」 9. 13)

当地に於ては平良北舎内に於て既報の屠殺場新築経営につき其の定款作製の為五ヶ字の人民集会これあり目下作成中にて候。尚ほ同校舎に於ては午後 3 時間位つゝ立津春方氏の

宗教講話ありて聴衆百余名熱心に聴講致居り候（後略）。

1910（明治43）年

39. 宮古より▲本郡師範同窓会 エム生（「琉球」8. 26）

夏休みを利用各種の会合の催さるゝは例の通りなるが、我が同窓会にありては（中略）、去る13日祥雲寺に於て開会して島司、視学をもお招きすることになりぬ。我が同窓は在郡の者38名、他国及び他府県に奉職又は勉学中の者6名なるも聴講の爲め那覇へ出掛けし会員もあり其他事情あり欠会せしもありて出会せしは27名にてありき。（中略）次いで多年他府県にありて中等教育に従事せる立津春方氏其の教育的比較的鋭眼を以て各方面より観察せられし宮古人士の欠点を数挙して滔々流るゝが如き能弁を以て一々適例を示して説明せしは大いに会員の注意を惹く所ありき。（後略）

40. 宮古発展策（続） 新参居士（「沖縄毎日」9. 9）

4. 人材を教育界に招聘すること。（前略）本郡の各学校の統一を図り教員をして献身的に教育に尽力せしむるは本郡県下急務中の急務なり。而して其手段、方法は多々あるべしと雖も余輩は郡教育者に教育を施し感化を与へ感情の融和を図り得る人格崇高にて徳望高く識見豊富にして材能拔群なる人材を教育界に招聘するの外他に途なきを信ず。是れ余輩が斯る人材を招聘するの必要を唱ふる第二の理由なり。

然るに南海の一孤島に吾人の要求する人材を内地他府県より招聘するは実に言ふべくして行はれ難きことたり。思ふに立津氏の如きは本郡出身にして郡村の爲めに生命と財産及び名誉を抛擲して顧みざるの精神を存せるを以て教育界に招聘せば喜んで快諾することゝ信ず。今や嘗て高師に学び且つ多年内地に於て教育に従事せるを以て□新教育思想を有し幾多多年修養を積みたる結果皎々たる山上の月見るが如き彼の人格と泰然自若として動せざる彼の性情は衆人の必服する所なり。且つ彼は本郡出身の人材中の先輩にして多年平良校に訓導したりし因縁あるにより現今の教員にして彼の薫陶を受けざるもの殆ど1人もなし。されば彼等教員に彼を師と仰ぎ父と尊み其言ふ所行ふ所に不満を抱くもの更になし。されば彼を教育界に招聘せば有力なる教育者に依て経営せられつゝある教育界は頓に刷新せられ紛々たる学校は氏によって調停せられ智識欠乏せる教員界は彼によって多量の知識を得ることゝなるべし。是れ余輩一人の憶測妄断によって陳述するに非らずして□人識見並那覇、首里に在る□□に依て等しく唱導せらるゝ所の不実なり。当局者乞ふ採納あらんことを。

1911（明治44）年

※41. 福岡県小倉高等女学校教諭 立津春方 六級俸ヲ給ス 明治44年3月15日  
福岡県

※42. 福岡県立小倉高等女学校教諭 立津春方 沖縄県宮古郡平良尋常高等小学校訓導二任ス 但本科正教員勤務 明44年3月30日

※43. 沖縄県宮古郡平良尋常高等小学校訓導 立津春方 沖縄県宮古郡平良尋常高等小学校長ニ兼任ス 明治44年3月30日

※44. 沖縄県宮古郡平良尋常高等小学校訓導 立津春方 三級上俸給与 明治44年3月30日 沖縄県

45. 我先覚者立津春方先生を迎ふ 在宮古 迷□子 (「沖縄毎日」3. 31)

我が立津先生は誠意督励深く学生を導き勤励一日の如く校務を修め帰厚着実汎く社交を詰ひ多年營々として本郡教育界に尽瘁し来りし。平良校長平田謹吉氏は此度都合により其職を退きたるを以て余輩は茲に学徳豊富、識見高くして郡民長寿の父兄が最も信頼敬慕せる本郡先輩者立津春方氏を其後任に迎へんとす。

抑も抑も立津氏が沖縄県師範学校へ入学せるは去る明治20年前後の当時の時代は旧習藩幣未だ半を去らず恰んど頑迷阿の状態にして世態人心混沌懷疑毫も時勢の推移を解せざる徒輩多く教育の必要を感じざる父兄を以て自然進んで新教育を受けんとするものなく郡外遊学を嫌ふものさへ多々これなりき。然り氏が奮然志を起し雄然郷を立ちしは正に氏の時期にありき。而して氏は幾多世上の万難を推し現る艱至と闘ひ多年勉学の効果空しからず遂に優等を以て卒業の日桂冠を負ひ帰郷したりき。而しても此と共に雄然遊学の途に上りし者ありしと雖も或は艱難に堪へずして半ば其校を退き或は家事の都合により徒しく郷に帰りて皆不成の憾阿に終りぬ。爾来立津氏は奮励努力熱誠に当校に於て教鞭を執りつゝ、傍ら幾多頑迷なる父兄に教育の必要なることを鋭意説解して自学心を進め本郡教育への普及を計りし効果実に勤しとせず。蓋し此の如きは本郡師範学校出身の嚆矢にして其既筭□歴々徴して其人物の如何に足るを得へし。

然り而して氏は小成に甘せず時代の趨勢に鑑みる所ありて進んで東都遊学を志し高師に入学し芽出度好成绩を以て卒業し後沖縄県立中学の教鞭を取ること数年にして都合により福学女子師校に職を移し現に其職にありしが今般郡民幾多の希望を容れ当局の招携に応じて平良校長の後任を快諾することに内定し此程愈々赴任の途に就く。云へば予輩法眼を開いて今後君が敏腕を振ふ功蹟如何を見んとす。(中略)立津氏敏なりと雖も若し上下意思の融通を欠き輿論を顧みずして偏狭漫然たるに於ては遂に社会□日情を失ひ其位置を保たず索去を遠せずして悶々の劇に終るは必至の条理あるとす。されば吾人は氏が此所に留意し民心の傾向に鑑みて民心の調停、意志の調和一致の共力たらんことを望して止まざるなり。

46. 立津春方氏 (「沖縄毎日」4. 3)

従来福岡県の小倉高等女学校に教鞭を執り居たる宮古の立津春方氏は宮古郡□平良尋常高等小学校長に任ぜられ之が為宮古に帰る途中目下那覇に滞在せり。

47. 平良村青年会を興すべし 宮古 白香 (「沖縄毎日」4. 28)

(前略)平良村青年会の起因は畏しこくも我 今上陛下が去41年10月御渙発賜はりし戊申詔書の聖旨に基き時代の流潮に深く鑑み万分一の対抗を期せんとして去る42年2月当村有志家が協衷一致を以て相当設備の下に創立したるものにして殊に其創立祝賀会の如き会員総挙未曾有の盛況を演じたる等余輩はこれ隆会の前兆として無限の感懐を以て前途

の祝福を祈り且いよいよ基礎□鞏固ならんことを祈る事切なりき。(中略)余輩は這般良教育者立津春方氏を我々校長に戴きたるを以て氏の赴任と共に兼て本会長に仰ぎ將さに瀕死せんとする本会の運命を開拓し根本的に基礎の鞏確を計り諸般の設備を行ひ以て遠久維持の方法を講じて多年穩健なる發達を期し目的を遂行し民利村益の実を挙げられん事を希望して止まざる所なり。

希くは立津氏首となりて大に會運を啓發し盛に經綸を行ひ經國濟民の実を収められん事を會員諸君夫れ自覺せよ。

※ 4 8. 平良尋常高等小学校訓導 立津春方 平良村学務委員ヲ命ス 明治 4 4 年 5 月 1 日 宮古島庁

#### 4 9. 宮古通信▲孔子の釈奠挙行 宮古生 (「琉球」6. 8)

宮古郡は近来祭典滅亡の兆ありしが立津春方氏が小学校長に赴任以来敬神の意を表され其行れる處の祭典に由て旧來の(ヨタ)祭は革新せられつゝありより一般其風に感化し祭典の革新しつゝあるは一般經濟の爲め大に喜ぶべきである。去る 5 月 1 9 日は平良小学校に於て孔子の釈奠を挙行せられたるが近来未曾有の盛典を極めたりと云ふ。其主催者として申すまでもなく立津春方氏を始めとし松堂惠親、親川惠寛の 3 氏にして會するもの 2 8 0 余名の多きに達し老若男女の参拝者引きも切れぬ有様なりき。會員の重なる者は各官庁の吏員、小学校教員、商人及び各村の有志等なり。會場の設備及び釈奠挙行の順次其他凡てのこと皆若輩の知らざる處多く年老いの話には昔の孔子祭も今のこれに劣れりとのことである。釈奠終るや小山□一及び立津春方氏の講話ありて後御味汁を頂戴し散會したるは午後 6 時なりき。

#### 5 0. 宮古短信 (「沖繩毎日」6. 1 4)

平良校は校長として立津春方氏赴任されて以来校風一変し校規振肅せられ申候。尚ほ一層氏の活動あらんことを期待仕候。過日同校にては同窓會之れありたる由に候。女子部は未だ分立の運びに不至候。多分本年中には六敷事と存候。(後略)

#### 5 1. 宮古通信 GM 生 (「沖繩毎日」6. 2 2 ~ 2 3)

福岡県立高等女学校に数年間教鞭を執られ候立津春方氏を我々宮古郡平良尋常高等小学校長に迎へたることは今猶江湖諸彦の記憶に新しきことと存じ候。吾々平良住民は本村發展の爲衷心より同氏を歓迎したるものに候処果して同氏の事業には効果の見るべきもの多々有て平良人民は恰も暗夜に光を得たる思ひ致して皆々満足し此頃は至る處に立津先生と云ふ声喧しく有之候。実に昔の近江聖人を彼郷人が慕ひしも斯くなりし哉と申し候はゞ余り大袈裟に聞え候半も兎に角熱心なる歓迎と仰慕とを受けられたることは事實に候。斯くまでに人望を得たる人の執務振り訓育振りを紹介するは敢へて無用の事にもあらざるべく否寧ろ世□精神的に公務に従事する人の参考になることと存じ候。さて同氏は赴任後直に校務の整理に手を着け傍社会教育に留意し居らるるものと見受け候。即ち部下職員に対しては本郡一般の欠点たる不清潔、不整頓、不規律を一日も早く矯め直す様勧告し職員の散らかしある履物の如きも手づから揃へて与へられ又職員會の結果に依り時々職員の家宅を



巡視して清潔、整頓、□□を批評せらる事もある由承り居り候。尚教案の□製も密案を促し而して検閲の結果は朱書弔しとの事に候。勿論批評的、要求的記事の尋き事と存じ候。斯く申し候はばあまりに八釜敷人かなと誤解せらるゝ人々もあらんかなれ共同氏の態度や身ぶりは決して然るものには無き候。目下は教授細目編纂中多忙なるに拘らず四学年以上の児童の綴り方帳を一学級5冊宛取り集めて一夜の中に検閲して統計表を作り□日は職員会を開きて綴り方教授の注意すべき事項共御話しこれある由に候。根気強き人と感心仕り候。同氏が執務日誌を拵えて校務の処理進行など一々記入しつゝ居らるることも吾人の模範とすべきことに候。(6. 21)

校内に於ける執務の有様は右の如くに候。次に社会教育の手始めとしては距る5月19日数百の有志を平良校に招かれて孔夫子の祝典を挙行し6月11日平良高等科卒業生7百余名を招集して卒業生会を組織し同17日父兄会を開催せられ候。是等は本村未曾有の事に候。民風改善は同氏年来の抱負の由に候へば竜頭蛇尾に了りし平良青年会も遠からず復興する事と推察仕り候。

前述の如き次第に付部下職員と同氏に仕へる事は慈父のそれに於けるが如く一般人民の信用も日に重く平良の有力者共は民風改良上何か思ひ付きたる事もある時は直に同氏の許に走ると云ふ有様に候。然り而して同氏には幸にして部下に常識豊富にして而も人格高き富永氏居られて後押しせられ候へば同氏の事業は着々と進むべく由之觀是平良校運の発揚せんことは火を見るより明らかなる事にして随て郡教育界にも好響を及ぼすこと存じ候。喜ばしさのあまり御報道まで如此に御座候。(6. 22)

## 5 2. 宮古通信 (二) △平良校の近情 (「琉球」6. 23)

是迄平穩無事に暮し来りし平良校に於ては近来人民の集会集會とて足繁き被存候。即ち孔子祭だの卒業生の總會だの父兄懇話会だのと種々の会合の由にて御座候。

而して是迄平良校創立数十年の星霜を経過致し候も右等の会は夢にだに致し不申実に父兄として常に遺憾に存居候処立津春方氏が本校に赴任以来は学校も何となく繁はしく人民も心引き立ち右の会と申し候ても来賓を除くの外平均800名以上宛出會相成りし由にて御座候。目下農民は粟蒔りだの甘藷植付だのと繁忙に繁忙を極め申候にも拘らず斯く人民奮て出會とは立津氏の此地に於ける信用察せられ申候。サテ会毎に氏の有益なる訓□ありて一同満足する所と相成申候。兎に角本郡に於て未曾有の出會員ありしは慶賀すべき傾向と存じ候。尚立津氏の前途有望なるを祈ると共に益々奮闘されん事希望仕候。

## 5 3. 宮古短信 (「沖繩毎日」6. 23)

去る6月11日午前9時より平良校卒業生打合会を平良校講堂内に開催致し申候処集まるもの大凡2、300名に達し近年稀なる集合にて有之候ひき。先づ定刻を告ぐるや一同入場の後君が代の唱歌をなし引き行き立津校長登壇左の件につき懇篤なる訓話之あり候。

1、母校と卒業生の關係 2、卒業生の地位 3、忠臣 4、祖先崇拜は日本民族の特性にして我が世界無比の国体の由て来る所也 5、廉恥を重ずること 6、真勇を練すべし 7、礼儀を鑑みざるべからず 8、服従は美德たるを忘るべからず 9、共同心を養

成す 10、節儉を勉むべし 11、努力は其性を完ふする所以也

而して同校職員岩見、仲宗根、伊志嶺ら訓導の演説ありと。後協議事項に移り申候。其の要は 1、卒業生を以て青年会を組織すること 2、青年会は毎年8月に定会を開催し臨時会を必要に応じて開くこと 3、会長を校長に役員を校長の指定にて部下教員を以て之に充てること

右異議無く可決致し散会仕候。尚ほ来る17日午前9時より同校生徒父兄を巨集し打合せを為す由に候。(後略)

※54. 推薦状 立津春方殿 本会特別会員ニ推薦ス 明治44年6月25日 帝国在郷軍人会平良村分会

#### 55. 片山の大敗北(「琉球」8. 14)

虚傲尊大な片山が本県に来てから只一度大へこみにへこんだ事がある。それは立津春方君が宮古に赴任の際県庁に出頭して片山にも挨拶に及んだ時片山は例の体度で立津を眼下に見下し君は高等師範の出身で且つ永らく中等教育にも従事して教育者としての学力と云ひ又経験と云ひ間然する所はないが只一つ君にも注意したいと云ふのは本県出身の人が一体に常識かない。君も常識の点は能く注意したまへと云った。之を聞いた春方居士は言下に大喝して曰く君の云ふ常識とは何の事だ。ウソを付いたり諛辞をしたりするのか常識なら僕には絶対出来ないんだとやったので流石の片山もキャフンと参ってしまった。

#### 56. 宮古通信(「琉球」9. 6)

夏季講習会 本月3日より3週間の予定を以て開会 毎日午前8時より同11時迄3時間宛にて講師は平良校々長立津春方氏にして 学科は国語文典、国民読本、漢文(菜□譚)三科なり。毎日出席会員平均50名程なりき。

#### 57. 宮古青年会の再興(「琉球」10. 11)

本会の創立たるや既に3年間の遠きにありと雖も其会則に風俗習慣の一時に改良し得ざるものありて漸々衰微の有様を来しつゝありしが此度立津春方氏の平良校に赴任せらるゝや本郡且本村民の一致協力に乏しく其上進歩に遅きは即ち青年会の衰微に関す、天の利地の利も人の和に如かずやと之が再興を企てらるゝに及び各字の有志皆氏の説く所を感じ各里毎に支部会を開き氏を招きて講話を乞ふ事28カ所即ち平良5ヶ字全部に及べり。

茲に於て本月1日には平良青年音楽会を開き氏を押しして会長となし28名の支部長を置き其他幹事、理事、実行委員百数十名を撰定して愉く閉会せり。

総会の順序 1、詔書奉読 2、議事 3、演説 4、漲水御嶽に参詣 5、閉会 以上にして開会は9時40分、閉会正午、会場平良校の校舎にて出席会員の幹部のみにて百数十名なりき。▲会の目的 教育勅語並戊申詔書の御趣意を遵奉し民風の改善、産業の発展並に自動勤儉の徳を養ふを以てす。(宮古通信)

#### 58. 宮古便り(「沖繩毎日」10. 12)

(前略)立津校長は本郡先覚者として歓迎せられ一部郡民の崇拜一方ならざりしが其行動余りに常軌を逸し候為今や郡民より余り悦ばれぬ傾きこれあり候。氏は青年会の再興、同

窓会の定期開催等を企てしも成績更に拳がらず候は余り後輩を愚弄せし結果にはあらざるか。將に予言者郷里に容れられざる為かと被存候。(後略)

#### 59. 宮古通信 (「琉球」12. 4)

本月17日平良校に於ては秋大運動会を平良馬場に於て開催せり。

会場平良校を距る11町余にあり 長さ300間巾30間余にして4周は常葉の老松高く生ひ立ち松風とヒュヒュとして万歳を百唱せるものの如し。会場に入れば来賓席の中央より高3丈程に大国旗を揚げ之を中心として数千の小国旗を吊し4周は繩を以て楕円形にラチを造り父兄席たの音楽堂たの赤十字席等の設などありき。

(中略)閉会を告ぐ 児童一同整列の下に立津会長曰く今日の運動は元気よく規律正しくなせり。今後益々奮闘せよと天皇陛下万歳三唱の聲に閉会せり。

因に記す。当日は百数十回の運動にてし之を短時間にて活動せるは其校日常の主義実現せられたりと謂うべきなり。(後略)

※60. 沖縄県宮古郡平良尋常高等小学校訓導 立津春方 職務格別勉勵ニ付金15円賞与ス 明治44年12月20日 沖縄県

#### 1912 (明治45:大正元) 年

#### 61. 宮古通信 (「琉球」1. 7)

(前略)昨年来立津春方氏来島し青年会を再興せし結果同会を基礎として百般の事を計り候事と相成り候。本年よりは益々好果を得べくと存候。(後略)

#### 62. 宮古通信 通信子 (「琉球」4. 1)

蔬菜品評会 3月27、8日の両日間平良校托舎に於て平良青年会第1回の蔬菜品評会を開催せり。種類は大根、人参、甘藷を始めに、3種ありき。此会たるや本村而も本郡に於て始めての事なれば縦覧者引きもきれず僅か2日間に於て2万人以上の多数にて殊に当校には児童の学芸会ありし為大混雑を極めたり。先出品物の内第一衆の目を引きしは人参なりとす。近来は其種子は他府県より取り寄せたりとの事なるが普通の大根と大差なく1尺5寸周りにて長さ2尺5寸程もあるもの珍らしからず。本郡は人参作に適當なるを賞するに足る。次は大根や甘藷等も多かりしも普通以上とは認められざりき。

閉会式 28日午後3時40分同校に於て閉会式を挙行せり。来賓には小山判事、橋口島司を始め12、3名程あり。会員は青年各支部長 支部内の代表者として列席ありて其式順は 一同敬礼、詔書奉誦、賞品授与、審査員の報告、会長の祝辞、来賓祝辞、支部会長総代の答弁等にして其審査報告によれば審査員は本青年会員より最も蔬菜に興味を有し而も老練家6名と本会にて選抜して審査せしめし由にて授賞者は一等4人、2等4人、3等6人、4等9人、5等5人、6等12人、計40人もありし由なり。午後5時頃立津会長の答辞ありて閉会せり。

因に記す。平良青年会が再設せしより7ヶ月の短時日にも拘わらず其成績著しく且つ本村而も本郡に無かりし蔬菜品評会を本青年会が嚆矢として設立せし等は国家の為嘉すべき

事にて道路問題と言ひ品評会と云ひ青年会と云ひ皆立津春方氏の尽力多きに居れり。

### 6 3. 宮古通信 通信子 (「琉球」8. 4)

那青年会 平良村に於ては明治42年以来平良青年会の設けありしも微々として振わさりしか立津春方氏帰郷後之を振興し今や当青年会は一の中央機関の如く活気を呈しつつあり。殊に下地村は青年の団結心強く目下は模範町村の一となり、城辺、伊良部の両村又会の必要を感じ以て盛に其会の効果の現はるゝを聞く。誠に郡の發展上大に賀すべき事なり。されど斯る狭き本郡に於て4村に分れ協議事項等の異なる事は好ましからず成るべく歩調を整へ一村一郡の如く郡青年会の組織を講じられたきものなり。

### 6 4. 宮古通信 通信子 (「琉球」8. 26)

青年会 本月21日午前9時半より平良校北校舎に於て平良青年会の評議員会を開催し左の件々を議決せり。1、喪章に関する件。該件は矢張本島地方に於て最初一定せざりしが如く本郡に於ても同様に曖昧の中にありき。されば本会に於ては首里、那覇と同じく結髪の子及び女子は共に簪をつけざること他は勿論普通式により喪章を附けること。2、9月13日所謂大葬日には本会員は総出□て遙拝式を平良北校舎にて挙行し更に記念木を同校内に植えること。3、盆祭に関する件。本問題に於ては種々の評議ありしも首里、那覇に準ずること。4、9月13日の大葬日には屠獸を為さざること及各料理屋の如き場所と雖も大葬日迄は音楽を奏すること無く矢張り謹慎すること。その他釈尊の延期、蔬菜品評会に関する件等ありて石原理事、立津会長よりの会に対する注意並に他の理事より那覇地方に於ける本郡の評判につき慷慨演説等ありて閉会せしは午後1時。

※ 6 5. 沖縄県宮古郡平良尋常高等小学校訓導 立津春方 職務格別勉勵ニ付金36円賞与ス 大正元年12月23日 沖縄県

## 1913 (大正2) 年

### 6 6. 離島近信 宮古より (「琉球」2. 28)

平良青年会 宮古郡平良青年会は1月26日平良校南校舎に於て開催し善行者表彰式、会則訂正を行ひたるが定刻午前10時に至り会員300名余会場に満つるや立津会長は開会の挨拶を為し直に平良村字大三俵支部会員同村同字593浜川めが並に同村西里字□59上地実任の褒賞式を行ひ終りて会則訂正並に同会に於ける要件議定に移り 議案第1号なる会長か支部会を視察すとあるを監視に訂正すとの議題に対し支部会長垣花恒栄氏は右視察と監視とは効力に於て左程差異なきのみならず体裁上から言ふても又は普通の文字使用上から言ふても右の場合は視察の方が宜しからんと姿勢正しく起立して発議するや一名の異議者なく満場一致を以て元の俣視察に為すべく議定しそれより議案第1号より第10号迄の議定を終り午後の5時閉会したるが受賞者に対する褒状は左の如し。(後略)

### 6 7. 離島通信 宮古より (「琉球」3. 2)

青年会法話 平良祥雲寺は近年家屋の手入れをせざるを以て非常に荒れ暴風雨如に屋根を破壊し戸破れ雨洩れ誠に只今にては見る蔭もなき有り様なるが平良尋常高等小学校長立

津春方は数年以前より教育事業と宗教の密接なるを研究され如何にもして此廢頽せる祥雲寺の隆盛を計らんと苦心され昨年の如きは病軀を顧みず本寺に到り善僧の派遣を嘆願し或は嘆願書を出したるは一度に止らず 博多聖福寺主職東瀛禪師の門下に入り禅法を極めたる程の執心家なれば苦心の結果昨年12月より村内青年有志者を寺院に集め毎土曜日宗教に因める講話と岡田式静座法の講習をなし此頃は非常の盛況を呈するに至れり。

布教師来る 立津春方氏の苦心空しからず本寺臨濟禪宗京都妙心寺派より志佐鳳洲と云ふ布教僧2月1日入港の汽船二見丸より来島相成り目下平良村祥雲寺に止錫中にて氏も本寺よりの命に依り当分祥雲寺の管理人となり同寺院の整理中(後略)

※68. 沖縄県宮古郡平良尋常高等小学校訓導兼校長 立津春方 二級下俸給与 大正2年3月31日 沖縄県

#### 69. 立津校長の出覇(「琉球」9. 19)

宮古尋常高等小学校長立津春方氏は本島各地の学事視察の爲め昨日の便船にて出覇したり。同氏は同島の教職に奉ずる外一方に於ては同島青年会長として民間の公共事業に尽瘁する所あり。現に風俗の取締に内法処分を応用して其効果を収めつゝあるの外に今回の道路問題の解決に就ては尤も力を尽したりと云ふ。

#### 70. 宮古組合道路開鑿起工式(「琉球」10. 20)

平良、下地、城辺の3村民が大奮発と大決心とを以て12万円といふ大起債もて企画せる三村道路開鑿の件はいよいよ去る14日平良尋常高等小学校校庭にて起工式及び地鎮祭挙行せられ候。参列員には島庁員、各村長、村会議員、外有志等にて無慮160余人 定刻となり参列員一同着席するや管理者より工事器具授与これあり候。枝手以下人夫は該器具を受領し急速走り出て、起点より事□に土を運び来ると立津氏之に七五三繩を張り及び榊を立て次で降神行事を行ひ□抜の祝詞を奏す。次に献饌続いて此普請中は怪我過ちなく無事に竣工せしめられんことを祈る意の長文の祝詞を奏する等立津氏はすべて神官の代理をつとめられ候。次に管理者以下枝手及参列員総代の拝礼するや管理者より一場の誨告あり。立津氏又起つて昇神行事と撒饌をなしこれにて全く起工式及祭典を終へ式後祝宴ありて午後1時頃散会いたし候。(宮古通信)

#### 71. 伊良部校の落成式(「琉球」10. 22)

宮古郡伊良部村に於ては此程伊良部尋常高等小学校の落成式を行ひ山口島司、郡各小学校長、村内有志者、学事関係者等臨席し山口島司、立津校長の祝詞に次で国仲校長の答辞あり、立津春方氏の作に係る落成式唱歌を歌ひて式を終り 続いて宴会となり席上立津氏の演説ありたる後余興として同校児童の運動会及び村民の角力等ありしが来賓者6百余名に達し盛会なりき。

#### 72. 平良校の運動会(「琉球」11. 22)

同校運動会は去る3日即ち先帝の天長節なりし記念日を期して行ふべかりしに雨天の爲に遺憾ながら翌4日挙行したり。午前9時立津校長式辞を朗読して開会を宣するや運動は開始せられ候。同校は平生特に体育を奨励する人に各児童運動会振りの勇ましき且つ疾走

の熟練せると共に観覧者の喝采を博し候。又かくて当日運動の華とも申すべき高女生のカドリードは何れも筒袖の姿勢凛々しく動作軽快にして拍手喝采湧くが如く起り候。(後略)  
(宮古通信)

※73. 平良尋常高等小学校訓導 立津春方 職務格別勲励ニ付金35円賞与ス 大正2年12月20日 沖縄県

1914 (大正3) 年

74. 宮古島通信 (「琉球」1, 7)

旧臘25日には平良村最寄七原青年会の原勝負受賞祝賀会を七原学校にて挙行致し候。山口島司、立津校長等参列し最寄の人民総出にて余興には綱曳き、相撲、クイチャー踊等あり同部落空前の賑ひなりき。(中略)

祥雲寺に於ては旧臘26日より仏教講習会を開催し立津春方氏般若心経の講義と仏教大意の講演之有候。

75. 宮古短信 (「琉球」2, 19)

立津春方氏は一昨年10月来毎土曜日に祥雲寺に於て有志者に対し主として仏教上の講話を為され候処今回此会合を一誠会と称し且つ従来とは少しく趣を加へ会員には重に高等卒業の青年を集め大に当地精神界開拓の為に奮闘す可く画策中に有之候。而して会則を分つて綱領、規約、実践事項の3部とし大に勤儉力行を奨励し敦厚の美風を促成するに努力す可く当地風紀改善上少なからざる効果を見る事と囑望致され居申候。

76. 宮古郡教育界の紛擾 (「琉球」4, 14)

宮古郡にては今回立津平良校長五代城辺校長、外郡内各学校職員の大移動を行ひたる結果郡内各村民の間利害相一致せず為めに留任運動、排斥運動等惹起し郡内大混乱を極まるに至れるが之に就き其の顛末を報告せば左の如し。

事の起りは昨年未平良校長立津春方氏と同校訓導石原雅太郎、下地寛栄、勝連盛章、富盛寛卓氏等との間に意志の疎通を欠き感情上常々離反すること度々あり 終に石原氏等は立津校長排斥の目的にて同校職員中石原氏外11名謀し合したる上石原氏総代として去月初旬島庁に中馬視学を訪ひ立津校長の部下たるは面白からざれば他に転任し度しとの希望を述べ置きたる由なるが今回俄然立津平良校長は城辺校長に、五代城辺校長は平良校長に、前記石原雅太郎氏は西辺校長に、外下地寛栄、勝連盛章、富盛寛卓、の3氏外10数名の転任ありたるが平良校区域にては立津氏の如き良校長を転任せしむるは子弟の為甚だ良らず殊に立津校長排斥者は皆夫々良地位を与へられしに反し校長に従順なりし山内、石嶺、奥浜の3氏を流島も同様池間、長間、伊良部等の偏鄙の地へ転任せしめたるが如きは当局の処置として面白からずとなし立津氏の留任を島庁に請願し一方城辺にては立津氏は道路問題其の他に就きても平良の為に尽力し他地方へ対し同情薄きに依り校長として同校に迎ふるは宜しからず殊に村会にて予算も決定せられたる今日立津氏の如き高給者を連れ来ることは全く当局者が村会の決議を無視せるなりと主張し且つ2、3年前同校より平良校へ

転任せしめたる教員を亦々立津氏と共に城辺校へ転任せしめたるが如き村民の意志を無視せるものなりとて五代氏外二、三教員の留任を希望し島庁に迫り又西辺にては今日紛擾の首謀者とも云うべき石原氏を校長たらしめて子弟を教育さするは甚だ心快からざればとて極力排斥したり。之れが為め立津氏、五代氏、石原氏等は其の立場に困り何れも病氣と称し自宅に引き籠りて出校せず各村民等は毎日集会して之れが善後策を協議し島庁との交渉を続行し居れる由なるが平良校区域の如きは島庁の態度の判然せざりを遺憾とし11日晩協議の結果委任状を作成し直接県知事へ立津氏留任の請願を為さしむべく人民総代として大村寛栄氏を昨日の便船にて出覇せしめたりと云ふ。

#### 77. 宮古郡の紛擾（「琉球」4. 28）

宮古郡に於ては立津氏排斥に起因する各小学校長の異動に就き平良、城辺両村とも不平少からざる由は過日報道したる通りなるが之に就き城辺村に於ては25日村民大会を開き2000余名集会協議を遂げしが一昨日其協議に基き愈よ最後手段として区長、議員、役場員全部辞表を提出したりと云ふ。

#### 78. 宮古郡城辺村の大混乱（「琉球」4. 30）

宮古郡城辺村にては今回の教員配置に対し村吏員及び議員等の不服の動機となり山口島司の全村におけるやりぶりにつき種々不満の声高く遂に村吏員、村会議員及び区長等全部辞表を提出したるを以て自治機関茲に停止し去る25日より27日まで3日間は村役場を閉じて村事務を執行せず全く無政府状態となれる実に県下未曾有の大渾沌出来せり。其顛末左の如し。

今回立津校長外2教員の城辺校に配置せられたるを以てこれ全く当局が村予算及び村民の意志を無視せるものとせる。村吏及び各有志は若し五代校長留任請願にして容れざる時は村吏、議員、区長等総辞職すべく決議したり。

かくて県当局に直接請願すべく収入役狩俣氏外2人出覇したるに県当局の意向と山口島司が委員等に申したる□異なる処ありとのことにより山口島司に対して村民は大いに激昂し去る25日執行村長は青年会長の資格を以て村民を招集したり。目下農民大忙の折りも拘わらず各鋤鍬を抛けて会するの無慮2000有余名、執行氏外6人は順次演壇に立ち異口同音に山口島司の眼中には城辺村なしとの意味の演説をなしたり。さなくも昂憤せる村民は憤激して止まず遂に満場一致を以て左の決議をなし更に執行氏は「本日より吾々は役場の事務を取らず」と宣告して解散したり。

一、村民は再五代校長の留任を島司に迫ること。但し此希望にして容れられざる限りは村長以下の総辞職を決行すること

かくて執行氏は右の決議を遂行せんと吏員以下の辞表を携え他の委員3人と山口島司に会見すべく参庁するや河辺警察署長及砂川、座喜味県会議員は極力其調停に奔走したるに結局県当局が山口島司に申したると請願委員に申したることに行違ひあるに付中馬氏出覇県当局に打合せの上確答すべければそれまでは一先づ辞表は村長の元に預り置くこととして引取りたりといふ。

元來此紛亂の真相を察するに謂ゆる五代校長の留任希望といふは真底より同氏を村民が敬慕せるにあらずして全く種々山口島司に対する不信任よりして遂に其急所をつかんと特に該難題を持ち出し山口氏をして絶体絶命の苦境に陥らしめんとの意に出しなるものにて今回氏に対し要求すべき事項は尚3、4件有といへば村民の激昂は当分鎮定の見込なしと或消息通は語れり。(宮古通信)

#### 79. 宮古の學校騒動(「琉球」5. 4)

誰か鳥の雌雄を知らん 拜啓平良校に於ける校長、職員間の低気圧は今更の話にあらず候。夙とに其前兆現はれ雲行きの怪しきもの有之候ひしが最近其軋轢益甚しく遂に今回の大爆発を見るに到りたる次第に御座候。平良校の職員間には所謂青年派なるものありて?は立津氏排斥を企てたるが遂に郡当局に強請して之を動かし立津氏以下校長、職員の大変動を見るに到り問題の範囲益々拡大して平良、城辺両村の大紛擾となりたる次第に候。而して平良よりは大村寛栄氏、城辺よりは仲松弥仁氏各村民を代表して県当局に請願の爲出願たるも当局者に於ては今更前令を取り消す訳にも參らざるか故に言を左右に托して其請願を斥けし模様候。爲めに両村民は大に激昂して最後手段を取る事となり城辺村の如きは公吏及び村会議員の総辞職、児童の出席停止、村税の納付拒絶等非常手段を取りつゝ有之候。さらぬだに定見なく節操なき宮古人士の事に有之候へば形勢の險悪を加ふるに連れ問題は益々錯綜して到底紛糾を解くに由なき状態に陥り居り候。其結果郡当局は勿論、立津、五代両氏を始め問題の火元たる青年派に至る迄皆窮地に陥りて四苦八苦を極め共喰ひ共倒れの状を極め居り候始末にて此紛擾か如何に解決せらるるやは容易に予測す可らず候。而して其責任の所在の如きも之が他の地方ならば極めて明白に断定し得可く候へども何分心理状態の複雑な宮古島民の事なれば五十歩百歩の相違にして其是非曲直も判じ難く所詮は善悪の標準を離れて勝てば官軍敗くれば賊の曲事を演出す可きかと予想致され候。由来宮古島は難事の土地なれば吾人は今回の紛擾を以て郡当局の責任を問ふの余りに残酷なるを思はざる能はず。釈迦や孔子を引っ張り出して宮古島司の椅子に据ふるも恐く島民の謀反性を制する能はざる可く候へば今回の事件の如きも単に邪悪なる民族性の露骨なる発動として御一笑然る可く候。島民に云はすれば喧々囂々各種の小理屈も有之候へども局外者の眼よりすれば誰か鳥の雌雄を知らんやとでも可申実以て笑止千万に候。不一。(宮古通信)

※80. 沖縄県宮古郡城辺尋常高等小学校訓導兼校長立津春方 二級上俸給与 大正3年5月22日 沖縄県

※81. 沖縄県宮古郡城辺尋常高等小学校訓導兼校長 立津春方 願ニ依リ退職ヲ命ス 大正3年5月22日 沖縄県

#### 82. 宮古通信(「琉球」5. 25)

學校騒動の紛糾 記者足下例の學校騒動は其の範囲甚だ拡大して目下の所にては何日鎮定せんとも予想つかず倍々紛糾の状態に有之候。

平良の有志は立津氏留任請願の目的を達せずともさりとして氏を此まゝに教育会より去らしむるは郡教育上痛恨の到りなりと氏に勧むるに暮□忍んで配所の月を觀んことを以てす



るの尋きも氏は各方面の事情を察する所あり且つ近年健康を損なひて静養を要するに付勞以て既に辞表提出せる由。

城辺村にて村長以下総辭職騒動を起こしたるも山口島司は各方面の人に調停方を依頼し遂に或重大事項の決行を条件として全部辭表を撤回し茲に一大段落を告げたる由に候。

記者足下平良にては児童父兄の側より五代氏に対し転任勧告を為すもの尠からず突然紛擾の渦中に投げ込まれたる氏の現状は実に氣の毒の至りに堪へず候。

### 8 3. 平良青年会に於て 立津春方氏談（「沖繩毎日」5. 30）

平良青年会長立津氏は城辺校への転任の故を以て会長を辭し 砂川真修氏其後任に当選したれど氏は私事に忙殺せられて到底同会各支部を監督するの余裕なきものゝ如し。されば會員の風紀又は他の取締事項にして俄然弛みつゝ又立津氏会長時代の如くならずあはれ同青年会は余の去ると共に其精神を失ひたるやの感なくんばあらず。

同會員規約貯金は曾て余が組合道路工事終了後に於て突然無職者の増加すべきを慮りこの際特に貯金の必要なるを説き遂に會員中該工事に作業するものは其賃金の十分の二つ必ず貯金すべく規約したり。仍て之を山口島司に報告するや氏曰く「十分の一にては貯金の目的達せず且つ起債申請の際に内務省と約束せしこともあらば是非四分の一は貯金せしむるように」との命令的依頼ありしかば余は山口氏の意を奉じ極力會員を勧誘し為め尋数の會員より甚だしき反抗さへ受けたけれど更に意とせず五分の二つ、貯金せしむることを断行し来りなり。

然るに今回余が会長を辭するや金銭の取扱上役場や現砂川会長に信を置かざるものすらありて種々の流言止まず遂に貯金を引出すもの続出し到底制止せられべくもあらずなれる由。若し夫れ山口氏にして言責を重んずるあらば内務省に対して豈惨死せざるべけんや。

図らざりき氏は「人民が貯金が出来ないといふなら仕方がない」と吾不関焉たらんとはされば吾人は氏にして斯る精神ならば最初あれほどに余を陣頭に立たせて苦しめずともよかりしにと今更ながら氏の優柔不断を憫笑せざるを得ざる也。

余は曾て山口氏が其老父の発病してより死去に至る間に鶏3百羽、玉子3千個を用ひたると吹聴するを聞き実に氏が数字に於ける強記に一驚せざるを得ない。

而して氏の強記は単に自己の家政上の数字の止まらず各方面に於て其特性を表せり。即ち本郡に就任以来教育会又は其他の公会に於て一たび口を開くや必ず該統計的、数字的ならざるはなし。随つて氏は郡治上該統計的、数字的に画策せるもの考定せるもの少なからざるが如し。

然れ共氏は其強記せる数字的の考案企画を単に舌頭の陳述に止めて何等実行の緒につけるものすら更になきに付き最早郡民は氏の陳述に飽きたるものゝ如く昨今は氏が折角演壇に立つことありても「又例の統計の」と耳を傾くるものなきは実以て御氣の毒の至りである云々。

### 8 4. 宮古紛擾顛末（「琉球」5. 30）

学校騒動 宮古の学校騒動は目下の所にては何時鎮定せんとも予想つかず倍々紛糾の状

態なり。

彼の城辺村の大混乱は五代氏留任運動といふは同氏も明言せる如く只表面の申立てに止まり純然たる当局不信任の精神に出づるを以て山口氏か余を辞せしめて同村の支出額さへ軽減せしむれば鎮定せんとの明案も何等効力なかるべし。却て同村の有志間には山口氏の此策に対して「氏は教員を器物のやうに扱んとす。城辺如何に貧なりといへどもかく教員を矢鱈に置き代へるを欲せず」と憤慨せるものあり。

随て同村有志並に村會議員中には余に対し上述村民紛擾の意志を告げ頻りに出勤を勧告したり。

又平良有志間にありても余の辞職を遺憾とし或期間までは忍んで配所の月を觀るべく勧告したるもの絶えざりしも余は山口氏の意を察し且つどこまでも部下教員監督不行届の責を引いて辞職したり。

城辺村に於ける村長以下の総辞職問題は山口氏不信任を決議し或は教員配置の実務者たる中馬、波平二氏の辞職を迫る等風雲頗る穏かならざりしかば山口氏の狼狽只ならず例によりあらゆる方面の人に其調停方を依頼せしが遂に二氏を退職せしむるを条件として一先づ辞表提出を見合わせたりとぞ。

次に彼の十二名党に対しては教員中気骨あるもの及び平良村民の多数は大に憤慨し彼等に対する当局の処置はこれ明かに多数者の前には比較的道義の行はるべき教育界にありても尚正邪異にするを示し延いては一般にストライキ的行為を奨励するの嫌ひありとし余の辞表提出後は其憤慨日々に度を高めつゝあり。且つ彼等は尚結託して毎月一回必ず会合し其都度穏かならぬ議決をなせりといへば紛擾を免れざるべし。

想ふに今回学校並に道路組合に於ける紛擾は固より種々錯綜せる事情のあることなれど要するに中馬氏が事ごとに感情の奴隸となり□事を処理せしに出でざるはなく随つて其辞職は一般の輿論となれり。(後略)、(立津氏の談話)

#### 85. 立津春方氏得度式 (「琉球」6. 3)

立津春方氏は来る6日午後2時より首里安国寺に於て得度式を行ふ由。

#### 86. [投稿] (「琉球」6. 6)

送立津春方君拳得度式帰宮古島 鷺泉

曾為垂帳育英身 今化提灯覺果人 絶島憑君開宝地 暮天獅吼濟斯民  
其二

飛錫不須千里巡 即身立地説三因 山河大地一禪榻 爛水松風又比隣  
緑堂

畏友立津春方君より本日君か得度式に参列の招状を受く。君は高等師範学校を出て中小学の教育に従事すること多年おのづから学識貢獻浅からざるものあり。茲に翻然身を禪門に委するは君の性行と経歴に鑑み所期の志遠きを思ふ。前山鬱葱東叡を望み將た慈円の名吟を連想して

おほ比叡や小ひえの山の夏木立 わ□葉にかをれすみそめの袖

### 87. 立津春方氏得度式（「琉球」6. 7）

立津春方氏の得度式は昨日午後2時首里安国寺に於て挙行す。志佐鳳洲氏戒師東凛禪師の代理を以て得度及び転班式を執行□式後立津氏の挨拶あり来賓は尚順男爵、岸本代議士、當間那覇区長、知花首里区長、伊江朝助氏、臨濟宗並各宗僧侶、牧師、伝道師等10数名の列席者ありたり。

### 88. 立津正徹氏出発（「琉球」6. 8）

立津正徹氏は明日攝陽丸便にて宮古に帰り同地祥雲寺住職として布教に従事す可しと云ふ。

### 89. 祥雲寺の由来（上）（下）（「琉球」6. 10～11）

（上）這般立津正徹氏が住持になって赴任する宮古祥雲寺は同郡平良村字西里にありて頗る由緒の深い寺院である。堂宇は首里の安国寺よりもモット小いが小高い丘の上に建って樹木鬱蒼たる寺林を有し境内も広い眺望も好い郡中無比の清区浄域である。此処に宮古仏教の開拓者たり精神界の指導者たらんとする我立津和尚は飛錫を天風に立て、方にこれより入っては教外別伝不立文字の三昧境に安禪し出で、は一切衆生の煩惱迷夢を攪破する一大獅子吼を試みんとす。其の地其の人に叶い其の人其の地に叶うと云ふべしである。

抑もこの祥雲寺の由来を尋ねるに慶長16年薩州檢察使一行の建立と吉田東伍氏の大日本地名辞書にも出ている通り即ち琉球尚寧王の時代である。今度の住持正徹和尚は禪宗だからこの寺も今は無論禪宗に属すべきだが元は真言宗に属して山号を龍峯山と云った。（後略）

（下）（前略）如斯由緒因縁の深い寺であるけれども星移り物換り世道人心の頹廢と共に一寺の運命も衰残に傾き先年一風來僧の住錫を見たけれども遂に何事をも為し得ず夜逃げ同様にしていなくなった。其の跡に這般立津氏の如き勇猛精進の快僧を迎へたのは以てこの由緒深き寺院をして其の名を保たすと共に更に一段の光輝を添ゆるであらう。

### 90. 宮古通信（「沖縄毎日」6. 20）

高橋課長及び佐藤視学は本月4日來郡山口島司が自ら遙□船まで出迎へするの優遇を受けつ、島庁の会議室に宿泊致し候。

同6日郡教育部会開催に付二氏出席高橋氏の講演あり。同7日平良村にては学校の紛擾事件に関して父兄□会を催し高橋課長に内願の趣ありとて数百名の父兄は同時に押し寄せたり。

されど同課長は先ず随行せる佐藤視学をして父兄に逢ひて内願の趣きを聞き取らしめ、更に自ら出で、「只今の内願につきては後に書面を以て答申すべし」と言ひすてたるのみにて立ち去りたる由なるは該内願の要領は

1、十二名党に対する当局の処置は将来ストライキ的行為を奨励するの嫌ひあり。社会風教上黙止し難きに付斷乎たる御処分ありたきこと 2、中馬氏は身島庁視学の職にあり

ながら十二名党と氣脈を通じ?々彼等と密会して立津氏排斥の卑劣行為ありたるは断じて穩当ならざること 3、今回の学校紛擾は郡教育会を混沌せしめ延いて平良、城辺二カ村の大紛擾を来し以て社会の秩序を攪乱したるに付ては郡当局者其責を引くべきこと 4、五代校長不信任のこと、の4項なりし由。然るに高橋氏は俄然岐阜県に転任したるに付かくて今更重ねて氏に申すも甲斐なければ新大味知事の着任を待ち委員を出覇せしめて請願すべしといふ。(中略)

又高橋氏は城辺に出張したれど学校を參觀したる外今回の紛擾事件に関して何等調査せざりし由、氏今や残務として形式的に參觀する迄のことなれば固より当然のことに候。

且つや今回の紛擾事件は色々事情の錯綜せる上に謂ゆる十二名党が中馬氏の後援を得てなしたる吾がまゝなる行動の真相はとても一官吏が官僚式の調査もて知るべくもあらず、これ即ち、該紛擾事件が其発生せしより6ヶ月後の今日に至るまで更に解決せず依然教育会並に一般社会に暗潮の流れて止まざる所以に候。

随つて吾人は今更軟弱なる郡当局に申の愚なるを知ると共に県当局が少しく英断を□て事を根本的に氷解せしむるの快挙あらんことを望むや切なり。

#### 9 1. 宮古通信 (「琉球」7. 18)

(前略)平良学校紛擾事件の余波尚ほ治まらず或地方の学校にては所謂十二名党中或教員は他の同僚より甚だしき擯斥を受けて出勤もせず病氣と称して引籠り居る由。

先月前高橋課長出張中学校問題に就き請願せし平良の父兄は同課長は佐藤視学立合の上書面を以て請願に答ふべしと明言したるに拘らずたとひ同課長は既に転任したりとは云へ今に何等の消息なきにつき官吏の無責任を鳴らし不日大味県知事に請願すべしといふ。(後略)

#### 9 2. 中馬視学退職 (「琉球」7. 22)

宮古島庁書記兼視学中馬與市氏は今回退職せり。

#### 9 3. 宮古通信 (「琉球」8. 21)

(前略)夜学会 同会は本月初旬組織せし平良丹誠会夜学部の催しにて立津、新里、奥平の3氏法律、漢文につき毎夜2時間づつ一般希望者に裁判所出張所にて講習せり。因みに云ふ。該丹誠会は目下会員数4百有余名なるが其目的とする処は主として社会風紀の改善を策ると共に青年の修学及び身体の鍛鍊をなし更に村治に関する事項を研究して自治の発展に資すべしと云ふ。同会の運動部は毎日曜日に有志者の撃剣会を催すべく講演部は毎月1回講演会を開き又記録部は同会々報を発刊せんと目下夫に計画中なり。

伊良部農会 にては御即位記念事業として赤貧者を除く外毎戸金10錢以上郵便貯金をなすことを契約し去4日より実行せるが其成績頗る良好なる由。

而して同会は毎年青年の爲め夏季又は冬季講習会を開催せるが本月も富永校長に依頼して夏季講習会を催し又立津正徹師を聘して一般老若男女に対し3日間講演会ありき。師は

祖先崇拜の大義と孝道とを説くに全然土語を以てしたれば聴講者は十分了解して其裨益せること蓋し勘からざるべし。

#### 94. 宮古通信（「琉球」8. 26）

拜啓本郡平良校にては去る16日午後10時より同校校舎に於て同窓会を開催致し申候処出席会員二百余名にて五代会長の開会の挨拶ありて後立津春方氏外2、3会員の有益なる演説等あり余興としては会員の撃剣、柔道等の催あり会員十二分の快を尽して午後4時散会いたし候。右御報道迄。早々。

#### 結びにかえて

立津春方は教育界を去ったのち、「丹誠会」等の活動の延長線上に、社会教化活動に挺身、村議選・県議選、衆院選等にも関わって、自ら県議2期、平良村長1期などの政治活動に入っている。それを記すには所定の枚数がつきてしまったのもさることながら、それ以前の教育活動とは大きく変貌していくため、一応ここで区切り、残りの資料は次の機会に紹介したい。

『宮古先覚者の面影』で、稲村賢敷は「如雷立津春方伝」を執筆、沖縄師範在学中の大正3（1914）年、夏休みの帰省活動を通じ、「所謂十二人組の反対陳情があり、立津さんが失意の人であったように記憶している。この時位、私は郷土の姿を醜く感じた事はなかった。向う見ずの我侪者として師範在学中をすねてきた私は断然起って『5万島民に激す』という演題で十二人組とは何ぞや、青年党の正体如何と単刀直入の論法をとり義憤の限りを叩きつけた事を記憶している」と、編者の亀川恵信に語っていることを付記しておきたい。さきの両「伝記」等では窺えない立津の世界である。

新聞資料の紹介に当たっては、おもに最新刊の『平良市史』第10巻「戦前新聞集成上」を活用させてもらった。また「辞令」は立津時男氏の提供で平良市史編さん室に収蔵されているコピーを活用した。記して感謝の意を表するものである。

なお今回改めて新聞資料を整理しつつ『平良市史』第10巻の編集、解説に当たっては、自分で思うほどには資料を十分に読みとってはいなかったらしいことを痛感させられていることも付記し、後日を期したい。（未完）

（なかそね まさじ）